今も誰かしらいるだろうからイチャイチャ出来るはずもない。そのままなんとなくその場に留まり世間話に付き合い、台所を出た後、「じゃあ」と一〇一号室と一〇三号室の間の廊下で分かれる。一昨日も昨日もまんまとそのパターンだった。

「……ハイジさんの耳がピンクなのって、苺の食べすぎなんじゃないですか」

少しでもふたりきりでいる時間を引き延ばしたくて走はそんなことを口にしてみた。

耳や尻尾の色は生まれつきで、もちろん苺の食べすぎなんかでその色が左右されるわけがない。だが、清瀬は本当にそうだとしても不思議じゃないくらい異常なほどに苺が好きだ。人にはバランスよく食べなきゃ駄目だぞなんて云ってくるくせに自分は苺ばっかり食べている。

走はふわふわとやわらかそうな清瀬のピンクの耳をじっと見詰めた。真っ黒で頑固な性格を示すように直立している自分の耳と違い、穏やかな性質を現すみたいに清瀬の耳は先の方が僅かにお辞儀している。垂れ耳とまではいかないが凄く可愛いと思う。

触ってみたいなと思って、ふと、耳や尻尾が性感帯な人もいるという話を思い出す。耳を触られ眉を顰めて喘いでいる清瀬の姿を想像し、走はぶわっと赤くなった。

「そうだよ」

「えっ！」

清瀬は本当に耳が弱いのか。

一瞬、自分の妄想が清瀬に筒抜けになったのかと思ったが違った。清瀬は「俺は生まれたときは本当は白兎だったんだ。しかし、苺ばかり食べていた所為で段々耳と尻尾に色がついてきてね、今ではこんな苺ミルクみたいな色になってしまった」と続ける。

「そ、そうなんですか……」

そんなわけがないのは解っているのに、動揺と後ろめたさから走は清瀬の言葉を鵜呑みにしそうになる。清瀬はくすりと笑うと走の手を取った。

「嘘だよ。この色は生まれつきだ」

そのままその手に引かれてドアへと向かう。赤い顔の走は今日もなんの進展もなかったと、こっそり小さな溜息を漏らした。

走は悶々とした日々を過ごしていた。

清瀬とは仲良くやっている、と思う。卒論で部屋に引き篭もりがちの清瀬が偶に大学に出てきたときは校内で待ち合わせて学食に行ったり図書館に行ったりする。ニラを伴い河原に散歩に行ったり、商店街に買い物に行ったりもする。

清瀬が初恋の人で初めての恋人でもある走はそういう毎日に満足もしていた。

けれど、相変わらず抱きしめて触れるだけのキス以上のことは拒まれる。我慢出来なくなってきて、昨日など一旦離れた唇を追いかけて再び強引にくちづけようとしたら首が折れそうな力で顔の向きを変えさせられた。そこまで嫌か、怒っているだろうなと腕をほどいてそろりと見ると、清瀬は困ったように笑っていた。

走には清瀬の気持ちが解らない。

一緒にいられる、想いが通じ合った、それ以上を望むのは強欲なんじゃないかとも思う。だけど、最初の一回だけよくて、その次からは駄目な理由が解らない。もしもあのとき清瀬にはっきり撥ね除けられていたら、きっと自分はここまで固執しなかった。してはいけないんだなと納得したはずだ。あのときはよくて今は駄目な理由が解らないから不安になるし、もう一度自分のことを受け入れて他の人には許さないことを自分だけに許して欲しいと願ってしまう。

とぼとぼと学食に向かいながら走は重い溜息を漏らす。今日は清瀬は大学には来ない。代わりといってはなんだが、走の手には赤い布に包まれたお弁当箱が握られている。

貧乏なので菓子パンとかカップラーメンとか、そんなものばかり食べていたら清瀬に怒られた。ちゃんとしたものを食べた方がいいのは解っているがお金が続かないのだと弁明したら、なんとお弁当を持たせてくれるようになった。本日もとても大学生男子が作ったとは思えぬ出来のお弁当を用意してくれたので、走は無料のお茶と水のある学食でそれを食べるつもりだった。

なりゆきで清瀬がアオタケの他の住人の朝ご飯や夕ご飯も賄うようになってはいたが、こうしてお昼ご飯の世話まで焼いてもらえるのは走だけだ。

やっぱり自分は特別扱いしてもらえている。してもらったことで好意を測るなんて卑しい行為だが、清瀬は明らかに自分に好意を抱いてくれていると思う。自惚れかもしれないが、目を追うごとに自分を見詰める目の色が甘くなっていっている気がする。それなのに清瀬は自分を拒む。

走が清瀬を求めるのは清瀬のことが好きだからだ。走の世界は単純だから、好きならばもっともっと触れたくなる。清瀬だって走のことが好きなのに、一度は許したより深く繋がる為の行為を優しく禁じてくる。怒るでもなく嫌がるでもなく、困ったように笑いながら拒むから走は余計に清瀬の真意が解らなくなる。

もう一度溜息を吐くと、走はもやもやした気持ちのまま古ぼけたドアを肩で押すようにして開く。

学食の中は既に混雑していた。うんざりしたような顔つきで走は空いている席を探す。何気なく視線